

安全かつ健康な 「静岡県のウナギ・アユ」づくり研究

(予算区分 県単独 研究期間 平成16～18年度)
担当：水産試験場浜名湖分場

【研究の背景とねらい】

消費者の「食の安全」に対する関心に応えるため、食品としての安全性を確保する養殖技術の確立と、飼育履歴の情報公開を可能にするトレーサビリティの実現が必要です。

そこで、養殖現場におけるトレーサビリティを確立するため、その基本である飼育記録のあり方と、養殖魚の安全性を確保する飼育管理手法について検討しました。また、安全な養殖魚をつくる上で重要な医薬品については、医薬品に頼らない治療対策研究や、寄生虫対策として使用されていたホルマリン代替薬について検討しました。

【研究成果】

1 平成16年度

養鰻・養鮎業における「食の安全」研究については、県養鰻協会のトレーサビリティ確立事業を軌道にのせました。

寄生虫対策研究については、プラジクアンテルン、過酸化水素及びメトリホナートについて駆除効果を検討したところ、シュードダクチロギルスを駆除することができました。

ウイルス性疾病対策研究については、ウイルス性血管内皮壊死症を対象に実施し、培養ウイルスによる実験感染方法を確立しました。

2 平成17年度

ウイルス性血管内皮壊死症対策研究として、前年度確立した実験感染により飼育水温の影響を検討した。

20 から31 の間では、死亡率は18%から80%と飼育水温の上昇に伴い高くなりました。しかし、35 飼育では死亡率は18%と低くなることが明らかになりました(図1)。

また、35 飼育と同様に20 でも死亡率は低くなることを明らかにしました。ただし、20 での対策は経済的に難しいと考えられました。

3 平成18年度

ウイルス性血管内皮壊死症対策研究として、無給餌の効果をもとに30 で検討したところ、給餌区は56%の死亡率を示したのに対し、無給餌区は18%と低い死亡率を示し、無給餌の効果が認められました。この死亡率は35 給餌飼育と同程度の低い死亡率(18%)でした。また、35 での無給餌飼育はわずか2%の死亡率で無給餌と高水温の相乗効果が得られました。疾病対策としての無給餌及び高水温処理の期間は3日で効果が現われ、5日で効果は増大しました。また、処理魚は本病の再感染に対し抵抗性を有していました。

【研究成果の普及方法】

- ・毎年1回魚病講習会を実施し、研究成果を報告しました。
- ・広報誌「はまな」等で成果を伝達しました。

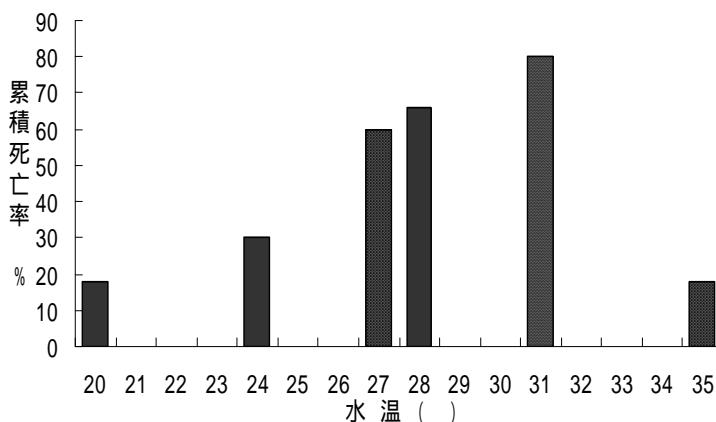


図1 ウイルス性血管内皮壊死症実験感染魚の水温別死亡率

(作成 平成19年3月)